

『君の事はパパママに任されたからね！』

巨乳でメガネのおさげ委員長、

セクハラ大王サクラの正体を隣の家のショタはまだ知らない。

【おねショタ】 【CFNM】

この物語の登場人物は皆役者であり、成人しております、ご了承ください。

玉子王子 著

1 章 立ちシヨンに割り込み、ショタチン観察。これがびっくり大人並

車二台がまあすり抜けられる道路。

友人らしい少女と話しながら歩く同じ制服の少女。

ベルトをずらして締めるのがかっこいいと思っている男子と、ベルトは普通だがまゆげを剃っている少年、茶髪少年。

朝、学生たちで道はにぎわっていた。

「おはよう」

気の弱そうな制服の少年。

声をかけるが、ギャルっぽい少女はチラッと見るだけで無視して、他の友人らも同じように通り過ぎる。

ため息をついて歩く少年。

いわゆる学校カーストという奴の最下層に位置する人間だ。

顔がパツとせず、運動部にも所属していない。

それでほぼ、下層入り決定といういい加減なランキングだが、決まってしまうと絶対なのだ。

と、その尻をおさげの少女が叩く。

「おはようっ！」

「あ、おはようサクラさん」

「もっと元気出しなよ。君はなんたって……」

口を耳に近づけ、熱い息を吹きかける。

「おチ○ポがクラス一でっかいんだから」

膝を締める少年。

タッチの差で、太股を撫でるサクラ。

「ガード固いのね」

笑って、去っていく。

と、また別の少年に近付いていく。

「おはよう礼二！」

「はうっ」

チャライ感じの少年。

その少年の股間を揉み、頬を緩める。

「うーん、やっぱり一番揉んで楽しいのはキ○タマ袋だよーね！」

「なにが「だよーね！」だ」

「やっぱりいきなりでないとタマタマは握れないね」

「セクハラやめろって言ってんだろ?!」

「あら、いうこと「だけ」は大きいんだ」

「な、なんだよ……」

頬を震わせる礼二。

それを見つつ、宝くじでも当たったような最高の笑みを見せるサクラ。

「いうこと「だけ」は大きいんだなあ、って」

「だ、だけってなんだよ……」

「別に」

笑って、離れようとしてもう一度名残惜しげに股間を揉み、さらに別の少年に狙いを定める。

「ったく、セクハラ女王が」

吐き捨てる礼二。

しつつも、股間をもぞもぞと触る。

揉まれたせいで反応し、位置が変わってしまっていた。

クラスの男子で、彼女に揉まれていない男など一人もいない。

と、彼女の足が弛む。

歯を剥くように笑っていたのが、急に清楚な顔を見せる。

「先生、おはようございます」

「いつもまじめだな、サクラは」

節穴台詞を決めつつ、笑いかける教師。

清楚そうな顔でゆっくり歩いて見せるだけで「まじめだな」といわれても困るが、その場だけではなく、教師の前では常にまじめそうに振る舞い、成績もいいからこそその信用だ。

それは近所の大人たちにもおよび、彼女の年下の少年らに対する「世話焼き」に偽装したセクハラに疑いの目が向けられたことはまだない。

「へっへっへ」

一日、授業はまじめに受け、休み時間は男子らへのセクハラ、教師たちの前ではまじめとスイッチを切り替えるようにメリハリのある時間を送って、サクラは下校する。

大体機嫌がいい彼女だが、今日は特にそうだった。

「あら、音楠斗（ネクスト）くん」

子供の名前って時々凄いのがあるなあ、と彼の名前をはじめに聞いた時思ったことをサクラは覚えている。もちろん、純日本人である。

というか、外国人でもネクストという名前はなさそうだが。

ともかく、赤ん坊はかわいかった。

もちろんその時代にはセクハラなどとんでもないことだ。

ただ可愛がってきた。

それが変わってきたのは数年前から。

巧妙なセクハラをかましつつ、何かチャンスがないかと伺っていた。

それが、今日転がり込んでくる。

今日から、彼の両親は出張なのだ。

その間、なんと都合よく彼女の両親も出張だ。そして彼女は一人っ子である。

その彼女の家に、ネクストが泊まりに来る普段から世話だかセクハラだかを熱心にやってきて、全幅の信頼を得ていればこそその夢展開だ。

——ああ、まじめにやってれば神様をご褒美くれるのね。

世話とセクハラを熱心に行った少女にセクハラチャンスをくれる。

そんな存在が果たして神と呼べるのだろうか。

「サクラ姉ちゃん！」

ネクストも一人っ子で、隣のお姉さんであるサクラによく懐いている。

手を振っていると駆け寄ってくる。

サクラも全力疾走で近付きたいが、ネクストが走る姿はかわいらしいし、自分が好かれている気が強く感じられるので自分からは近付かない。

——ああ、あんなに走って。よっぽど私のことが好きなのね。でへへ、これは結構強度の高いセクハラも可能ということじゃないかしら？

美少女とは思えない内面、内面からは考えられない清楚な美少女面。

優しいお姉さんの顔で語りかける。

「今日はうちでお泊りよ。聞してる？」

「うん、楽しみにしてた！」

「そう！ 私も楽しみだったわ！」

抱き上げる。柔らかい体。

男子たちのガッチリした、一部分以外骨ばった体とはまったく違う。

——おほおお、柔らけえ柔らけえ、このショタっ子が成長してガチムキになるなんて信じられないわ。

顔を見下ろしながら抱きしめる。脚を開いてしがみついてくる。

その動きに、顔を変えずにビクリと震えるサクラ。

一瞬だけ、目が下に行くが、密着しているので見たい部分は見えない。

見えないが、腹に押し付けられて感じる。

——おおっ、押し付けられてくるわ。ショタチンチ〇がお腹に！ この辺がチンチ〇で、この辺がタマタマね……ああ、いよいよこれが私のものに……

とんでもないことを考えつつ、微妙に腹を動かし、左右にずらして刺激していく。

セクハラチャンスは逃さない女だった。

「んっ」

ピク、と顔をゆがめるネクスト。

——お姉ちゃんのお腹が動いてチンチ〇が……お腹温かくて気持ちいい……あ。だめだ、まずいまずい。

「んん？」

優しいお姉さんの顔が、一瞬野獣に変わる。

瞬時に押さえつつ、ずれてきたネクストを上を引き上げ、きつく抱く。

しつつ、内心は平静ではない。

——ちょっとちょっと、ネクストくん……お姉さんのお腹で……恥ずかしい。恥ずかしいからはつきりいえないけど……おチ〇ボギンギンに勃起してるわ！ うふふ、あのネクストくんももう男なん

だな……だな。

これまでのセクハラでは、まだ反応したことはなかった。

というか流れ的にそこまで踏み込めなかつただけで、年齢的に当然のように反応できる年ではある。

そのまま歩く。

家は近い。

と、空き地にさしかかかる。

草が生え、土管が置かれたよくイメージされる広場。

「あ、お姉ちゃん、もう歩けるから」

「んー？」

——甘えんぼのネクストくんが自分で歩く？ 怪しいわねえ。

「それじゃ、下ろすね」

「うん」

降りると、周りを見て、走り出す。

きょろきょろ周りを見つつ、土管の向こう側に。

——あらあら、絶対オシッコね。こりゃチャンス到来だわさ。

唇を舐めるおさげでメガネの巨乳委員長。

よほど特別な訓練を積んだのだと、ありもしない想像をさせる見事な忍び足で土管に近付く。

——あ、やっぱり。

壁のほうを向いてズボンの前を弄っているのを見て、自分の予想が正しいことを確信する。

というか、この状況ではかの可能性もないだろうが。

しばらく黙る。

そして、チョロチョロと音がし始めてから動く。

ようは、引き返せない所まで行くのを待ったのだった。

「ネクスト君、何してるのお」

横に降り、前を覗き込む。

もちろんしゃがみ、近距離から。

——おっほお、思ったより大きいのねネクスト君の。

皮の間から、ドバドバと黄色い液体が周囲に飛び散る。

「あ、サクラお姉ちゃん……」

顔を真っ赤にする。

「あらあら、だめよそれじゃ」

「え？ ダメって何が？」

「うふふ、おチンチ〇はこうするのよ」

手を伸ばす。水滴が付いても気にせず、先を摘まむ。

——んー、あらこれ、感じじゃあんまり礼二の奴と変わらないような……

いや、それはないはずだ。礼二はサクラと同じ年ではないか。

それに、直接見たことはないのではっきりとはわからないことでもある。

「うわ、お姉ちゃんオシッコが……」

「大丈夫よ。それより、ほら」

慣れた手つきで。

本当に恐ろしいぐらい慣れた手つきで先を剥いて尿の飛びを安定させる。

「オシッコのときはこうやって剥こうね。ほら、真っ直ぐ飛ぶでしょ？ 遠くまで飛ばせたら、男の子として嬉しいよね？」

「う、うん」

よくわからないが、うなづく。憧れのお姉さんに一物をつままれる状況に興奮していた。

「あらっ」

つい、声を出すサクラ。ビンビンと音を立てるように、ネクストの肉芽が膨らむ。

「あ、お姉ちゃん……」

「凄いわねネクストくん」

摘まむのではなく、握るサクラ。

尿は終わっているのが幸いだった。角度が文字通り直角に近い。

「みんなには内緒にしてね？」

「う、うん」

よく分からないが、とにかくギンギンに反り立った肉棒を
憧れのお姉さんに握られたショタとしては、
顔を真っ赤にして胸を高鳴らせるしかない。
まじめなお姉さんとして、信頼しているからこそそんなゆったりした対応も出来る。

まじめなお姉さんは、ショタチンを凝視して唾を飲む。

——この子×歳よね……それにしちゃこれ、
凄いわほんと。おチンチ○大きい。
毛も生えてないのにああ、
キ○タマも立派じゃない、揉みたい。
でもそっちを触る名分はないもんね……。



よく分からないが、とにかくギンギンに反り立った肉棒を憧れのお姉さんに握られたショタとしては、顔を真っ赤にして胸を高鳴らせるしかない。

まじめなお姉さんとして、信頼しているからこそそんなゆったりした対応も出来る。

まじめなお姉さんは、ショタチンを凝視して唾を飲む。

——この子×歳よね……それにしちゃこれ、凄いわほんと。おチンチ○大きい。毛も生えてないのにあぁ、キ○タマも立派じゃない、揉みたい。でもそっちを触る名分はないもんね……。

摘まんでいたのが、指のリングで握り、徐々に他の指も握るのに参加してすべてモノについていた。

そういう触り方をする名分があるのかも謎だが、サクラは気にする様子はない。

耳に口を近づける。

暖かい息を吹きかける。

どのぐらいの勢いと量だと男がビクッと反応するのか、セクハラ女王として知り尽くしていた。

——うふふ、やっぱりこの子も同じね。自信つくわ。

「ネクストくんのこれ、おチンチ○ね」

「な、なに？」

「大きいのよ」

「お、大きいの？」

——ビクッとなったわ！ さすが巨根期！ っていうか、本当に巨根期終わった男っているのかしらね？

「大きいわよお。お姉ちゃんのクラスメイトの人たちでも、これより小さい人結構いると思うよ」

「うそ……」

「本当よ」

——って、まあその子らは小さいんだと思うけど。特に礼二とかダントツだけど、必死で隠すからねあいつは。

前はそれを補うためのようになんぱをしていたが、一時期すっぱり足を洗った。

最近はまだ、ズルズルとという感じでまた再開し始めているようだが。

——何があったのかしらね、やめてたときには。というか、再開したらまた似たような目に合うんじゃないのかな？

それとも、そうならないと確信したのか。

そんな感じはしない。

ただ、喉もと過ぎたという感じだ。

まあ、礼二のことはどうでもいい。

「まあ、大人なら普通このぐらいの大きさだと思うわ。うふふ、だからネクストくんの歳なら、すごく大きいよお。ネクストくんのおチンチ○大きいよお。大きいよお」

「やめてよっ」

「うふふ、ごめんごめん」

——って、大きいっていうたびにビクビク言ってるじゃないの。おチンチ○は正直ねえ。

「おチ○ポ、ほかの子と比べたりしない？」

「水泳で着替えるときとかはみんな絶対隠すから」

「そういえば、そうだったわねえ。私も小○生の頃は、周りの男子そんな感じだったわ」

今は、男女別に着替えるのでわからない。

と、いうことはない。

セクハラ女王として、何か理由をつけては男子更衣室に**奇襲をかける**サクラだ。

——みんなガッチリ隠して着替えてるわ。やっぱりペ○スの大きさの序列が明らかになるのはクッソまずいことなのねー、男の子にとっては。よく分からないわ、いろいろバリエーションあるのはいいことだと思うのに。

思いつつ、ふっと笑う。

「ま、処女の私にはよく分からないけど」

「え、処女ってなに？」

「あらあ、そういうエッチなこと、気になるの？」

「き、気にならないよ。っていうか、お姉ちゃん何言ってるの？ 自分で言ったんでしょ？」

「あら、処女なんていった？ うふふ、おチンチ○大きいから聞き間違えたんじゃない？」

手の中のものがさらに膨らむのを感じて、いとしげに握る力を強めるサクラ。

もぞもぞと恥ずかしそうだが、そこを握られては離れられないネクスト。

「関係ないよ。お姉ちゃん、放して」

「んー、何を？」

「え、なにをって……放してよ」

「なにを？」

ニヤニヤと、僅かに仮面がずれて本性を垣間見せるサクラ。

だが、まだ「おふざけ」の中に入るライン上だと性格に見抜いて行動だ。

計算された危うさでしかない。

きょろきょろと周りを見て、再びお姉ちゃんの顔を見る。

しゃがんでいるので、ごく近い。

「ん？」

——さ、いっちゃいなさいよ。お姉ちゃん、ネクストくんの口から聞きたいな、おチンチ○って聞きたいな。

「うふふ、何のことかな？」

「……おチンチ○だよ」

「え？」

「チンチ○！」

大げさに手を放すサクラ。

「あら！ 大きいから手と間違えちゃった」

また、ビクリと震えるショタデカチ○。

と、ネクストの目は大きく動いたためにブルンと震動し、小さく揺れ続けるサクラの肉ボールに注がれる。

——お姉ちゃんのオッパイあんなに揺れるんだ。

時々、揺らして見せて反応を楽しんできたので、ちょっと揺れるとすぐにそこに注目する習慣を持つに至っていた。

「熱いわ」

言って、肩を揺する。

ブルルン、ブルルンと巨乳が揺れ、ネクストの大人並のモノが小さい下着に入る邪魔をする。

——あらら、あんなデッカイ大人並のおチ○ポ、ショタパンツに入るわけないわね。

しばらく待って、萎えさせるしかない。

それはそれで楽しい時間だと思いつつ、いずれ**時間をかけずに萎えさせてやろう**と家に帰ってからの作戦を練り始めるサクラ。

体験版終わり

これから更なるセクハラ攻勢が始まります

よろしければ製品版で続きをどうぞ